

第1回環境経済施策調査会 論点メモ

■経済的手法の考え方について

- 経済的な手法で政策を行う場合、環境などそもそも市場に乗っからないコストを問題（対象）としているときに、市場を通じたインセンティブだけで考えることの限界などについても考慮しておく必要がある。
 - そもそも市場においてコストとして載っていない社会的費用を、何らかの仕組みで載るようにするなどの仕組みを創出し、そこに経済的手法を絡ませて調整
 - また、効果があるかどうかは別として、環境的な行動を起こす（起こさせる）ような配慮（仕組み）を加える。
- 経済的手法の担い手
 - 金の流れには、①公的な資金の政策への流れ、と、②私的な全体の貨幣のルートを環境にいいような方向に流し込む、というふたつの流れがある。
 - 経済的手法の担い手：プレーヤーには、行政、企業、個人、金融機関などがある。
 - 現在変化してきたお金の流れ・意識（市民や金融機関の動き）をどうやって巻き込んでいくか、どのようにうまく取り入れていくか、という観点も重要（世界の金融機関や投資家の動き、一般投資家や国民の意識をプレッシャーに感じ始めた金融機関の動き、都民の意識など）
- 企業・産業界などをまきこんで協力を得ていくためには、世界的には「なぜそのようなことをする必要があるのでか」についての「大前提」を共通認識をもって、そこから具体的になにをしていくかの議論を展開している例が多い。新たな経済的手法の創出にあたっては、さまざまなプレーヤーが入ってくるので、その人たちが共通で共有する、緑対策やヒートアイランド対策などの話を全て包含するような、従来のお金のあり方やコストのあり方を、がらりと変えるような共通認識を何か持てないか、検討したい。
- 経済とか金融が安心して同じ方向感で政策を打ち出していける、そういう東京都としての中長期的な政策上のフレームワークやベースをどうつくっていくかが非常に重要

■緑施策について

- 緑の政策の必要性を、抽象的なレベルではなく、もう少し施策に反映できるような意味で、どういうメリットがあるのかということをもっと目標立てないといけない。大きな目標だけではなく中目標レベル（施策の方向性や施策の考え方等）で、それが重要だということを立てて、その手段としてどのような経済政策手段があるかを考えないと。
- 第三者的に、価値があるから緑を守ることは重要だと決めているが、一般の人が動かないから、では金儲けをさせる、これだけ緑をやればこんなにお金が儲かるという形で引っ張っていくのには限界がある。なぜ緑を守る必要があるのか、それは税金が軽減されるから、金が儲かるからですよ、では、必ず行き詰る。
- 経済的手法を検討するうえで整理が必要な事項
 - 緑対策の目的（政策目的）
 - エリアごとの緑対策の考え方（目的と手法）
 - 公共の緑の問題と私有地の緑の問題（論点・課題や、手法）
 - 緑の量と質
 - みどり対策の担い手 など